
哀しい兄妹

Harry 英仁

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

哀しい兄妹

【Nコード】

N7603D

【作者名】

Harry英仁

【あらすじ】

壮介の通う大学で変死体が発見された。事件を追っていくうちに被害者の二つの顔が浮かび上がってきた。被害者の妹に隠された秘密。そしてその先には意外かつ哀しい真実があった。

第一章 大学で起こった事件

「ん、何だ？」

大学へと続く、長くて急な坂道を自転車で登りきった先、大学の入り口に、パトカーが数台停車しているのが見えた。俺は駐車場に併設されている駐輪場に自転車を止め、パトカーの方へと近付いた。パトカーの周りには数人の制服警官がいた。

何かあったのか、制服警官に訊ねようとした時、後方から俺を呼ぶ声が聞こえた。

振り向くと大学前のバス停から、瑞希がこっちに向かって走ってきていた。

「壮介君、おはよう」

「おいつす」

俺たちはいつものように挨拶を交わした。いつもと少し違うことがあるとすれば、瑞希はバス停から走ってここまで来たので、多少息が切れていることくらいだ。

因みに俺の名前は新谷壮介^{しんたにそうすけ}。羽音学院大学^{うねん}二回生だ。そして一緒にいるのは岡本瑞希^{おかもとみずき}。俺と瑞希は写真サークルに所属しており、そこでの縁で付き合いはじめた。つまり、俺のカノジョだ。

「何かあったみたいだぞ。俺も今来たところだけど、こんなカンジだ」

俺はパトカーの方へ手を差し出し、瑞希に説明してやった。

「うん、私もびっくりしたよ。でね、さっき藍ちゃんからメールがきてさ、何でも、西館の庭園で人が死んでいたんだって」

どうやら瑞希は俺より先に状況を把握していたようである。何だか悔しい。

俺は振り返り、大学キャンパスの方を向いた。門からは制服警官や私服警官が出たり入ったりしていた。

「死体ねえ……」

朝から少し憂鬱な気分であった。出切ることなら今日は大学に足を踏み入れたくはない。でも行かなければ単位が危ない。俺は仕方なく門をくぐった。

俺と瑞希が通う羽音学院大学は、羽音市の山の上にある緑に囲まれたキャンパスである。門へと続く坂道の沿道には桜が植えられており、春になると桜色のトンネルが新入生を出迎えてくれる。俺の中で「世界で一番綺麗な桜」だ。

そしてキャンパスについてだが、主に五つの建物に分けられており、まず学生課や就職課といった事務関係の部署がある管理棟がある。そしてその管理棟を中心に四つの棟があり、それぞれ北館、南館、東館、西館となっている。これら東西南北の棟には、俺たちが講義を受ける講義室に実習室、教授方の研究室等がある。また北館と南館の一階部分は食堂と売店になっている。

今回死体が発見された西館の庭園というのは、西館一階に隣接している。庭園と言えば聞こえはいいが、要は裏庭である。大層な設備があるというわけではなく、芝生と季節の花が植えられた花壇、あと休憩用のベンチがあるくらい。お昼休みに弁当を広げる人で賑わう以外で、あまり人影をみることはない。

俺たちもその庭園へ向かおうとしたが、西館自体に規制線を張られていたため、庭園はおろか西館にも入ることはできなかった。

ただ、警官同士の話している内容を聞いたり、野次馬の話を含ませると、なんとなく状況が掴めてきた。

死体の第一発見者は、大学に出入りしている清掃業者のおばちゃん。午前七時頃、おばちゃんは西館のゴミを処理するため、西館に置かれているゴミ箱を一つ一つまわっていた。そして八時前、西館のゴミを回収し、最後に庭園に設置されたゴミ箱の回収をするため庭園に向かい、そして死体を発見した。

被害者の名前は伊原賢一^{いはらけんいち}。うちの大学二回生。詳しい死因は判らないが、頭を殴打されたようで、頭から肩にかけて血で染まってい

たとのことである。

直接見たわけではないのでよくは判らないが、少なくともこれが殺人事件であることは理解できた。

「本日は全講義休講となります。各自速やかに学内から出てください」

大学職員が総出で学生たちに告げてまわっていた。そりゃキャンパス内で殺人事件が起こったのだから講義どころではないだろう。西館も全く機能しなさそうだし。こんなことならわざわざ来なくても、門の所で引き返していればよかった。

「帰るか」

俺は瑞希に向かってそう言い、踵を返した。瑞希も俺の横についできた。

「岡本せんぱーい」

不意に後ろから瑞希を呼ぶ声が聞こえた。聞き覚えのある声だ。俺たちは同時に振り向いた。すると見知った娘がこちらに向かってきていた。

「あ、藍ちゃん。メール見たよ。びっくりした」

「私事です。私が来た時はちょうどパトカーが到着した頃で、学内騒然でしたよ」

ショートカットでやや幼い表情の娘は未だ興奮冷めやらぬという感じであった。

この娘の名前は広田藍^{ひろたあおい}。大学一回生で俺たちと同じ写真サークルに所属している。つまり、俺たちの可愛い後輩である。

「何かエライ騒ぎになっちまったな」

俺は視線の先にある西館に向けて手をかざした。かざした指の間には、せわしなく動く警官と、折角来たのにすぐ帰らされている学生たちの姿があった。

「壮介君、伊原賢一って人知っている？」

「ううん、知らない」

瑞希の問いかけに即答した。伊原賢一という男は俺たちと同回生であるが、名前を聞いたことは一度もない。多分、違う学部の学生なのだろう。

「あの……」

後ろで広田が何かを言おうとした。俺と瑞希が振り返ると、そこには何とも複雑な表情……いや、今にも泣き出してしまいそうな表情の広田がいた。

「藍ちゃん、どうしたの？」

瑞希も広田の変化に気付いたようで、慌てて広田のもとに駆け寄った。

「実は……その伊原賢一さんというのは、友達のお兄さんなのです。言葉は出さなかったが、瑞希は驚きと戸惑いが入り混じった表情をしていた。そして俺自身も戸惑っていた。

何だろう。このイヤな予感……。

「薰ちゃんて言うんです、私の友達。薰ちゃんとはバイトも一緒に、とても仲良しなんです。薰ちゃんの話には、よくお兄さんが出てきていました。とても仲がいい兄妹だなんて感じていました。それなのに……こんなことになって」

広田の目にはうつすらと涙が滲んでいた。俺たちの大学で殺人事件が起こったのだから驚かないはずはない。しかし所詮は他人事。今帰ろうとしている奴らの中には、早く帰れてラッキーと思っっている奴らもいるかもしれない。しかし、殺された人間が友人の身内ならどうだろうか。サークルの後輩がこんなに悲しんでいるんだ。他人事だなんて片付けられることは、俺にはできなかった。少しでも早く帰ればよかったと考えた自分を恥じた。それは瑞希も同じよう、自分を戒めるように下唇を噛んでいた。

「藍ちゃん……」

正直こういう時にどう言葉をかけていいかわからない。それは瑞希も同じであった。瑞希は名前の他は何も話さず、ただ広田の肩を抱いてあげていた。

その時、一人の女性がこちらに向かってくる姿が見えた。女性は四十代後半であろうか、この大学では見ない顔であった。

女性は時折ハンカチで口元を押さえ、こちらの方へ近付いてきた。そして西館の規制線の前で止まり、近くにいた制服警官に声をかけた。

そして女性は制服警官が一礼をしてから規制線のテープをくぐり、西館の建物横から庭園へと続く細い歩道へ足早に入っていた。

第二章 伊原賢一という男について

その後、伊原賢一の亡骸は、司法解剖が行われてから実家のある三重県へと送られていった。通夜と告別式は実家の方で行われることになった。

その告別式に何故か瑞希が参列することとなった。瑞希の話を要約すると、そもそも後輩の広田が参列することになっていたが、広田が見知らぬ土地に一人で行くのが心許ないということになり、瑞希が付き添っていくことになった。

実を言うと俺も誘われたのだが、丁重に断った。あんまりあいう場には行きたくはない。それに、俺は俺でやりたいことがあった。羽音駅で喪服姿の二人（現地で着替えればいいのに、既に着込んでいる）を見送つてから、俺は俺の行動を起こすことにした。

それは伊原賢一という男についての調査であった。

最初はスルーしようと思っていた。しかし「あること」がきっかけで、俺の好奇心にスイッチが入ってしまった。

まず俺は伊原賢一という男を知ることにした。

色々な学生、先生方の協力を得ることができ、一応の人物像が浮かび上がってきた。

まず伊原賢一は俺と同じ二回生だが、一年浪人しているそうである。つまり歳は俺より一つ上。またこの大学には奨学金制度を利用して入学しており、講義の後はバイトに勤しんでいるようである。サークルはボランティアクラブに所属しているようだが、殆んど顔を見せておらず、幽霊部員扱いだそうである。見た目はちょっと軽そうな感じに見えるそうだが、実際はいたって普通、どこにでもいそうな学生のようにであった。

ただこれはあくまで大学内での話……。

夕方のワイドショーで、伊原賢一についての時間が割かれていた。

そこには、大学内での評判とは全く違う人物像が浮かび上がった。

大学外での伊原賢一の評判は、必ずしも良いとは言えないものであった。高校時代からガラの悪い連中とよくツルんでいたようで、また女性関係の評判は悪く、三角関係のトラブルは何度か起こしているようであった。

家族は実家にいる母と同じ大学に通う妹の二人。父は何年か前に病死しているそうである。伊原賢一の妹、伊原薫は大学一回生。現役で入っているから兄とは二つ違いということになる。兄とは違い非常に真面目な性格で友人も多いそうである。二人で一緒にいる姿も目撃されており、兄妹仲は良いという話である。しかしそんな兄が死んでしまったのだ。伊原薫の心中察するに余りある。

警察の方は、伊原賢一の交友関係について重点的にあたっているようである。また夜のニュースで、伊原賢一がつい最近、三角関係のトラブルがあったと報じられており、犯人逮捕は時間の問題という感じであった。

第三章 駅前にある蕎麦屋での出来事

翌日の昼過ぎ、瑞希からメールが届いた。内容は今からこっちへ帰ってくるというものであった。そのメールが届いて二時間後、羽音駅前では瑞希と広田を出迎えた。

「ただいま〜」

駅舎から瑞希が手を振りながら出てきた。後ろには広田も続いていた。

「割と早かったな」

「うん。うちらが参加したのは出棺までだから」

瑞希の顔は笑顔だったが、目の下にはクマができています。昨晚の通夜から式場にいたそうなので、あまり寝ていないのであろう。

「二人ともお疲れさん。あそこの喫茶店でコーヒーでも飲もうぜ」

俺は道路を挟んで向かい側にある喫茶店を指差した。

「壮介君のおごり？」

「ああ、広田はな。お前は自腹だ」

「なに〜！」

「アーホ」

こんなしょうもないやり取りをしながら、俺たちは喫茶店へと移動した。

喫茶店で一息ついてから、葬式の様子を瑞希たちから聞くことができた。

伊原家の親族は妹の薫と母の伊原紀子いばらきこだけだったそう、後は地元の人たちが手伝っていたそうである。しかしそれでも手が足りなかったそうで、瑞希たちも手伝いに参加したのである。

「あの人がお母さんだったんだね」

不意に瑞希がそう言ってきた。「あの人」とは誰のことを言っているのか、俺は見当がつかなかった。

「ほら、事件の日、帰ろうとしてた時に、私たちの横を通り過ぎていったおばさん」

事件の日……つまり、伊原賢一の死体が発見された日。俺と瑞希が帰ろうとしてた時、広田がやってきて、そして……、

「あゝ」

思い出した。庭園に入っていた人のことだな。そうかあの人が伊原賢一の母親だったのか。となると、あそこに行ったのは死体確認のためか。

「妹の薫はどうだった？」

すると瑞希は広田の方を向いた。広田は複雑な表情を浮かべ、コヒーには全く手をつけていなかった。

「ああ、まあ、そうだな」

俺は空気を読んでそれ以上何も突っ込まなかった。広田のこの表情を見れば、当日薫がどんな状況だったかは、何となく想像できる。

ここでみんな黙り込んでしまった。何だかイヤな空気だ。と、ここで瑞希が急に笑顔になった。何とか場の空気を変えようとしているのか。

「そ、そうだ。壮介君にお土産があるんだ」

瑞希はそう言つと、カバンを漁り紙袋を取り出してテーブルの上に置いた。

「何だこれ？」

俺へのお土産というからには、俺が開けていいのだろう。俺は紙袋を開けてみた。

そして紙袋から出てきたのは、

手打ち蕎麦 お持ち帰り用

ハンドメイド感溢れるラベルにはそう書かれていた。

「もう一回言つ。何だこれ？」

「蕎麦です」

広田が今日会って初めて口を開いた。それは何となくホッとするものであったが、反面何となくムカつくものであった。気のせいだ

ろつか、何か小馬鹿されいるような……。

「見たらわかるよ。え、なにこの人。今まで蕎麦を見たことないの？ 可愛そう〜 みたいな目でみるんじゃないよ〜」

「せ、先輩。それは言いがかりですよ」

何て長い説明のいる言いがかりなんだろうか。自分で言っておいて、自分に突っ込んでいた。

「だから、この蕎麦を一体どういう経緯でお土産になったんだって聞いているの。お前らが今日行った所って、別に蕎麦の産地でも何でもねーだろ」

お土産を買ってきてもらって、こんな言い草はないだろうと俺も感じているが、一旦振り上げたツッコミはそう簡単におさめることはできなかつた。

「も〜」

瑞希が呆れたようにため息をついた。でもどこか表情はほころんでいるようにも見えた。

「その蕎麦はね、お葬式が終わって帰る前に、お昼ご飯を食べるのに寄った駅前のお蕎麦屋さんで買ってきたの。けっこう美味しかったから、壮介君にもと思って」

なるほど。そういう経緯でこの蕎麦を買ってきてくれたわけか。

「いらないんなら、私たちが食べちゃうよ〜」

「いやいや、有難く頂戴致しますですよ」

瑞希が蕎麦をカバンに戻そうとしたので、慌てて手元に引き寄せた。

「もう、調子いいんだから」

瑞希が頬を膨らませると、横の広田が少し表情を柔らげた。

ああ、こんなだから周りからバカップルと思われるんだ……。

「あ、そういえば」

唐突に瑞希が指をパチンと鳴らした。何かを思い出したようだ。

「藍ちゃんがお手洗いに行っている間、お店のTVで事件のニュースが流れていたの。内容は特に進展はなかったんだけど、その時お

店の人が話してたの。伊原さん家の兄妹、昔はよくうちの蕎麦食べに来てくれてたな〜って」

意外な所で、事件との接点を見つけてしまった（といっても大したものではないが）。瑞希たちが立ち寄った蕎麦屋は、伊原家の兄妹が以前よく通っていた店のようであった。まあ二人の地元だし、駅前という立地条件も考えて、別に不思議なことではない。

「何でも賢一さんはざる蕎麦と親子丼のセット、薫さんは天ぷら蕎麦をよく注文していたんだって」

「ほ〜、なかなかいいチョイスだな」

瑞希は自分が仕入れた裏情報（これも大したことではないが）を誇るかのように話していた。俺も適当に話を合わせていた。

「嘘だ……」

しかし広田の意外な一言で俺たちのどうでもいい会話はストップした。

「どうしたの藍ちゃん？」

「薫ちゃんが……そんなのおかしいですよ」

広田の表情は明からに普通のものではなかった。広田は何に對しておかしいと言っているのだろうか？

「広田、何がおかしいんだ？俺たちにも教えてくれよ」

広田は一度コーヒーに口をつけてから頷いた。

「はい。単刀直入に言うと、薫ちゃんは蕎麦アレルギーなんです」

「へっ？」

俺と瑞希はほぼ同時に間抜けな声を上げてしまった。かつて天ぷら蕎麦を好んで食べていた奴が、蕎麦アレルギーだった？

「私たちが入学して間もない頃、初めて学食に行った時、薫ちゃんと一緒にだったんです。その時、薫ちゃんはパスタを注文していたんですけど、パスタを何口か食べた後、急に気を失って倒れてしまったんです」

すると瑞希が何かを思い出したような表情になった。

「あ、覚えてる。救急車来たんだよね。あれって薫さんだったんだ」

「はい。後で聞いたんですけど、学食では一つの釜で全ての麺類を茹でているんだそうです」

ここで俺もピンときた。

「なるほど。全ての麺類ってことは、パスタの他にもうどん・ラーメン、そして蕎麦」

「はい、そういうことです」

つまり全ての麺類を一つの釜で茹でているわけだから、蕎麦以外の食べ物にも蕎麦粉が付着して、それを口にしてしまう可能性があるというわけなのである。

蕎麦アレルギーは食物アレルギーの中ではとてもキツイ部類のもので、最悪の場合生命にかかわることもあるらしい。

「だからありえないんです。薫ちゃんが蕎麦を好んで食べていたなんて」

広田の話によると、伊原薫はパスタの表面に付着していた蕎麦粉程度でも失神してしまった。そんな人間が蕎麦をズルズルすすっている絵ヅラなんてとても想像できない。

しかし瑞希の話によると、蕎麦屋の店員は伊原兄妹の件を名指しで話していたそうだから、店員の勘違いという可能性も低い。

これは一体どういうことなんだ？

広田には申し訳ないが、これから何だか面倒くさいことになっていきそうな気がした。俺はとりあえず、もう冷めてしまったコーヒを喉の奥へと流し込んだ。

第四章 新谷壮介、電車の旅

翌日。

俺は伊原薫に会ってみたいと思い、それを広田に相談してみた。

広田によると、井原薫は現在実家に帰っており、しばらくは大学には来れないそうであった。

しかし俺も考えた。

だったらこつちから会いにいけばいいじゃないかと。

俺は講義がない平日に三重にある伊原薫への実家へと行ってみることにした。瑞希や広田は講義が重なっているため、同行はしなかった。

そして特急電車で揺られること約一時間半。俺はつい数日前、瑞希と広田が降り立った駅に降り立っていた。

この町、地図だけで見れば山奥のド田舎ではないかと思うのだが、それがどうして、俺の住んでいる羽音市よりも格段に開けていた。この近くを高速道路が通っており、大企業の工場が数多く誘致されているためであった。俺は瑞希に教えてもらった井原家の住所を頼りに、駅前ロータリーに停まっているタクシーに乗り込んだ。

タクシーに揺られること十五分。伊原家の近くに来た所でタクシーを降りた。

そしてほどなく、伊原の表札をみつけた。木造のなかなか年季の入った家屋であった。

「よし、いくぞ」

俺はこれまた年季の入ったチャイムを押した。

しばらく間があつて、玄関のドアが少し開いた。

「どなたですか」

ドアの隙間から若い女性が顔を出した。その瞳の色はあからさまな警戒心を滲ませていた。

「あの、突然すみません。俺、羽音の学生で新谷といます。あの、伊原君とは同級生でして……その……」

ああ、ちゃんと挨拶を考えてくればよかった。巧い言葉が出てこない。アホだ俺は。

若い女性の顔を覗き見ると、眉間にシワがより、警戒心はさらにアップしているようだ。

ああ、ヤベえよ。

「薫、どなた？ また報道の人？」

すると俺の後方から女性の声が出た。振り返ると四十代後半かと思われる女性がスーパールの袋を手に提げて立っていた。

俺はこの女性に見覚えがあった。この人は事件のあった日、学内で俺とすれ違った女性。つまりこの人は伊原の母である、伊原紀子さんということである。

そして玄関先から俺を睨んでいるのは、妹である伊原薫ということになる。

「あなた、どちらの方？」

伊原紀子は柔らかい物腰で俺に訊ねてきた。しかし俺に対する警戒心は持っているようであった。

「ああ、突然すみません。私、羽音学院大学二回生の新谷と申します。伊原賢一君とは同じ講義を受けていた間柄でして……」

警戒心に挟まれた俺は半ばヤケクソに言葉を吐き出していた。一緒に講義を受けていたなんてのは勿論ウソである。

すると伊原紀子はニコツと微笑んだ。

「そうですか。あなた賢一のお友達なのですね。これは失礼しました」

伊原紀子は俺の前を通り過ぎて門を手で押した。

「私、賢一の母でございます。さあ、もしよろしければお線香をあげてやって下さい」

俺はその言葉に内心ホツとした。まずは第一関門クリアである。

チーン

六畳の部屋に置かれた、奥に井原賢一の遺影が飾られている仏壇に手を合わせた。

俺の後ろには伊原紀子、そして先ほど母より紹介を受けた伊原薫が正座していた。

部屋が静まり返ったところで、俺は座ったままで二人の方を向き、軽く会釈をした。

「どうもこんな遠方までわざわざ来ていただいて有難うございます」「いえいえ、こちらこそ突然押しかけてしまって」

伊原紀子は俺に対する警戒心を解いてくれたようであった。しかし薫はまだ俺に対する警戒心を解いていないようである。まあ考えてみれば無理もないことだろう。この事件は連日ワイドショーで報道されている。だから記者の取材も連日に及んでいるのは容易に想像できる。中には心無い質問をぶつけてくる記者もいたであろう。

伊原紀子。何度も言うが見たカンジ四十代後半のどこにでもいそうなおばちゃんである。しかしやはり疲れているのだろうか、肌の血色はあまり良くないように見える。

そして伊原薫。以前に広田から聞いていた話にそう違いはなかった。歳の割りに少し幼いカンジのする見た目であった。しかし、やはり薫も疲れているように見えた。

正直なことを言うと、この場で蕎麦アレルギーのことについて訊ねてみたかった。しかしここで、二人の今の状況で訊ねるのは完全に場違いであった。俺だって空気の一つくらいは読むことができる。しかし他に聞きたいことなんてなかった。というよりも当たり障りのない質問なんか思いつかなかった。何故なら俺と伊原賢一は一度も関わりを持ったことがないのだから。

俺は早々に引き上げることにした。何もしゃべらないままこの場に居座れるほど、俺の神経は図太くはない。

その後、俺は二人に玄関から見送られながら、伊原家を後にした。

本当に勢いだけでここまで来てしまった。

結局俺は、線香をあげたこと以外に何か成果を掴めたのだろうか。

……

まあ少なくとも、二人の顔と名前は覚えることができた。

……俺はアホだ。

その後、俺は瑞希と広田が立ち寄った駅前の蕎麦屋にも行ってみることにした。蕎麦屋の場所は駅前の目立つ所だったのですぐ判った。暖簾をくぐると、先客が数名いるだけであった。平日のお昼過ぎ、どこにでもありそうな飲食店の風景である。

俺は取り合えず、天ぷら蕎麦を注文してみることにした。数分後、蕎麦が俺の元に運ばれてきた。当たり前の話だが、見たカンジは普通の天ぷら蕎麦だった。

そして食べてみるした。

ズルズルズル……、

なかなかの美味であった。

しかし、特段変わった蕎麦というわけではない。

天ぷら蕎麦をほぼ食べ終わった頃、店主と思われる人物が厨房から出てきて、店内に置かれているTVの前に座った。暇なのだろう。「あの、すみません」

俺は思いきって声をかけてみることにした。店主は広げようとしていた新聞をテーブルに置き、こちらへやってきた。

俺は取り合えず、先ほど井原家でも行ったような自己紹介を店主にもしてみた。すると店主は「大変だったね」という意味を込めてか、俺の肩を軽く二回叩いた。

ここから店主に伊原兄妹について色々質問を試してみた。

まず伊原兄妹がいつ頃からこの店に通い出したかだが、この店は十年前の駅前開発の際に開店されたそうで、兄妹はその開店当時から母に連れられて来ていたそうである。その後は三人一緒の時もあれば、兄妹で来ることもあったそうである。ただ、伊原賢一が大学

へ進学した頃から殆んど顔をみせなくなり、ここ一年間兄妹は姿を見せておらず、母が忘れた頃に一人で来店するくらいとのことであった。

「まいど〜」

店主への質問を一通り終えた時、一人の男性が来店してきた。男はグレーの作業着姿で、髪は金髪で耳にはピアスがぶら下がっていた。

「お〜、ミキちゃん、いらっしやい」

馴染みの客なのだろうか。店主は立ち上がり、その客を向かい入れた。

店主は水の入ったコップを男の元へ持っていく、二言三言話していた。すると、店主はこちらの方へ向き直った。

「ああそつだミキちゃん。彼、賢一君の大学での同級生なんだって不意な紹介で驚いてしまった。店主はこちらへと近付いてきた。

「彼は賢一君の小学校からの幼馴染で、原田幹郎はいつたみきおっていうんだ。賢一君のこと知りたいなら、彼に色々聞いてみるといいよ」

そして俺はその原田という男の前へと促された。

「で、何が聞きたいわけ？」

俺はテーブルを挟んで原田の向かい側に座っていた。原田の前には空になった井と吸殻ののった灰皿が置かれていた。そして原田は、タバコを片手にまるで値踏みするような視線で俺を見ていた。

しかもこの原田という男、眼光がとても鋭く、いかにも「昔はブイブイいわしてました」というカンジ。もしかしたら「現役」かもしれない様子であった。

俺の方から来て何だが、「蛇に睨まれた蛙」とはこのことなのではないだろうか？

こういったカンジで、俺がコチコチに固まっていると、原田はタバコを灰皿の縁でトントンと叩き灰を落とし、苦笑いを浮かべた。「ったく、そんなビビんなんて。別に取って喰おうなんて思っちゃ

いねえよ」

そして原田は一度タバコをふかした後、それを灰皿に置いた。

「あれだろ。伊原についてだろ？ 佐伯の仕業で間違いいねえだろ」

「佐伯？」

俺にとつて初めて知る名前だった。しかし原田はそれを俺が知っていることを前提としたような話し方であった。

「ん？ 何だお前、佐伯のこと知らねえのか」

ここで原田も俺のリアクションに違和感を感じたようであった。

そしてその佐伯と言う人物について説明を受けた。

佐伯裕二（たへきゆうじ）。伊原賢一とは小学校からの同級生で、最も古い幼馴染だそうである。伊原と佐伯はとも仲の良い間柄であったが、ある一件でそれは一変してしまふ。今から一年程前、伊原が佐伯の力ノジヨに手を出したのである。それもけっこう「強引なやり方」で。これにより佐伯は伊原に対し強い怨みを持つようになり、当時は「殺してやる」等の暴言を吐いていたとのことである。

いつかのニュースで報じていた三角関係のもつれというのは、このことなのであろうか。現在原田と佐伯に直接の接点がないので、その後どうなったかは詳しく知らないそうだが、噂によると佐伯は警察から任意の事情聴取を受けているそうであった。

その後原田は仕事に戻ることになり、話は終了となった。最後に原田と連絡先を交換し、蕎麦屋を出発した。

第五章 一人の少女に二つの影

一通りの調査を終え、俺は帰途につくことにした。

しかし俺はここでとんでもないミスを犯してしまった。

「次は宇方、宇方です」

「……あつ！」

時間ギリギリで慌てていた俺は、反対方向の特急電車に飛び乗ってしまったのである。仕方なく、車掌さんに事情を説明し、次の駅で折り返すことにした。幸いにも追加料金は請求されずに済んだ。

次の停車駅である宇方駅には三十分程で到着。電車が来るまで少し時間があつたのでトイレに行こうと改札口の方へと移動した。

そのトイレは改札のちょうど向かい側にあり、トイレの入り口の横には売店が設置されていた。トイレを済ませた後、缶コーヒーを買おうと思いついてその売店に立ち寄った。

「缶コーヒー、冷たい方」

俺がそう伝えると売店のおばちゃんは、屈んで冷蔵庫の一番下の段に並べられているコーヒーを取り出そうとした。

その時であつた。おばちゃんが屈んだ時に、売店の奥に張られている、やや年季の入った一枚の張り紙の存在に気付いた。

「何だ？」

俺はこれが一体何の張り紙なのか目で追ってみた。するとこの張り紙の一番上に大きな赤字で「探しています」と書かれていたので家出人の搜索ビラのようなのである。その字の下にはある人物の顔写真が掲載されていた。見たカンジ十代の少女のようであつた。

顔写真の下には、これまた赤い字で「杉山絵梨」と書かれていた。

この時、俺はイヤな予感がした。とてもとてもイヤな予感だつた。俺はその張り紙をケータイのカメラで撮影した。

「どうしたん？」

気がつくのと、売店のおばちゃんが缶コーヒーを持って訝しげにこち

らを見ていた。

俺はコーヒーを受け取り、この張り紙について訊ねてみた。それによると、この張り紙は約十ヶ月前に地元の間数人が失踪者の捜索ピラとして貼らせて欲しいと頼みに来たのだそうである。

これを聞いた俺は、ある「とんでもない」想像をしてしまった。

俺はその場を離れた。そして時計を見た。次の電車が来るまでまだ時間がある。俺は再びケータイを開き、さつき撮った張り紙の写真を画面に出した。

「よし、電話番号もちゃんと撮れている」

それから数日後の夜、広田からメールが届いた。伊原薫が明日から大学へ来れるようになったというものであった。俺はそれに対する返信として、明日の講義終わりに会うことができなにか打診してみた。

それから一時間程でして広田から「OK」の返信が届いた。

「悪いな。急に呼び出して」

「先輩、遅いですよ！」

俺の姿を確認した広田は頬を膨らませた。俺が時間を指定しておきながら、三十分以上遅刻してしまった。空にはもう夕闇が迫ってくる時刻であった。

「藍ちゃん、伊原さん、遅れちゃってゴメンなさい」

俺の後ろには瑞希も続いた。

そして俺たちの目の前には、不機嫌そうな表情の広田と、俺からの用件を全く聞かされていない、少し怯えた表情の伊原薫がいた。

俺と瑞希は二人の向かい側に座った。そして取り合えずコーヒーを二つ注文した。

それから数分後、コーヒーが二つ運ばれてきて、俺と瑞希はそのコーヒーを軽くすすった。

「あの、用件ってどういったことなのでしょう？」

俺がコーヒーカップを口元から離れた時、伊原薫が口を開いた。その表情はやはり冴えない。

「そうですね岡本先輩。私何にも聞かされてないです」

「ゴメン藍ちゃん。私も全然聞かされていないの」

広田には今回色々協力してもらったが、用件については何も話してはいない。それは瑞希も一緒だった。

俺は「あえて」この件を事前に二人には伝えなかった。

別に驚かせようとしているわけではない。

「さて……まず何から話そうかな」

別に焦らしているわけではない。本心だった。正直これから伊原薫に話すことは、俺の中で確証のない話であった。俺の想像の域を出ない話。だからある意味「賭け」であった。

「最初に呼び出しておいて遅れちゃったことは謝るよ。悪い。急にケータイが鳴って長電話になっちゃった」

向かい側に座っている二人は、「別にいいですよ」と手を細かく左右に振った。二人が早く聞きたいのはこんなことではないだろうから。

「さてと、伊原薫さん。早速観てもらいたいものがあるんだ」

俺はカバンから一枚の写真を取り出した。

「ケータイで撮った写真をし版で印刷してみた。ちょっと粗いけど、大体は判るだろ」

そしてその写真を伊原薫の手元に置いた。

その瞬間、伊原薫の顔色が変わったことを俺は見逃さなかった。

広田もその様子に気付いたのか、隣からその写真を覗き込んだ。

俺が伊原薫にみせた一枚の写真。それは数日前に宇方駅の売店に貼られていた家出人捜索ビラを撮ったものであった。

「え？」

広田もその写真の「奇妙さ」に気付いたのだろうか。一瞬にして表情が変わった。

「え、私にも見せて」

瑞希の言葉を受けて、広田はその写真をつまみ、瑞希に手渡した。すると瑞希は口が半開きになり、視線を写真と伊原薫とを行ったり来たりさせていた。それはまるで目の前にいる人物と写真の人物が同じであること確認しているようであった。

そう……「自分と全く同じ顔の人間」

ドッペルゲンガーと呼ぶらしい。残念ながら、俺はそのような人物に出会ったことなどない。

しかしこの中に、そんな経験をしている人物がいる。

「え……これって、伊原さん……？」

その写真を見た瑞希は、震える声でそう呟いた。

杉山絵梨という少女を探すために作られたこのビラ。それには杉山絵梨の顔写真が載せられていた。

ここにいる三人はその顔写真を見て、顔色が一瞬にして変化した。何故なら、この杉山絵梨という少女、今俺の目の前にいる井原薫と、まるでソックリ瓜二つなのだから。

俺以外の三人……正確には瑞希と広田の二人は、同じ顔を持った二人の少女を見て言葉を失っていた。このような事実、滅多にお目にかかれるわけではないし、またそう易々と信じることもできないであろう。

俺は再び伊原薫の表情を伺った。伊原薫はかなり動揺しているのか、視線が定まっていなかった。また、そろそろ夜になると冷え込んでくる季節のはずなのに、額には汗が滲んでいた。尤も、それは暑いから出てきた汗ではないだろうが。

「壮介君。これって一体？」

この三人の中で一番早く冷静さを取り戻したのは瑞希のようであった。瑞希は写真を摘み、俺の元へ戻してきた。

「この写真は前に伊原の実家へ伺った時の帰り、俺は間違って逆方向の電車に乗ってしまい、宇方っていう駅まで行ってしまったんだ。その宇方駅の売店に、これが貼ってあった。正直、ビビッたよ」

俺はその写真を手元に引き寄せてから、伊原薫の元へズイツと押

しやった。伊原薫の視線は相変わらず定まっていな。故意にその写真が視界に入らないようにしているのだろうか。

「これは、君だね」

俺の言葉に瑞希と広田が言葉にならない声を上げた。

「先輩、何を言ってるんですか？」

「壮介君。確かにこの写真の人と薫さんは似ているけれど、名前は全然違うし、全くの別人だよ」

すると今まで定まっていなかった伊原薫の視線が俺の顔を捉えた。

「そうですよ……何を訳のわからないことを。私は、伊原薫です」

小さな声ではあったが、伊原薫ははつきりと答えた。

しかしその答えの後、俺は間髪を入れなかった。

「違うな」

少し声を張ってみた。伊原薫の体がビクツと震えた。

「君は伊原薫ではない。杉山絵梨だ」

この時、広田は居ても立ってもいられなくなったのか、俺と伊原薫の間に入ろうとしたが、俺は言葉でそれを制した。

「広田から聞いたが、君は蕎麦アレルギーなんだってね」

しばらく間があつてから、伊原薫は小さく頷いた。

「しかしそれではおかしいんだ。伊原薫は地元子供の頃から通っていた蕎麦屋があった。僅かな蕎麦粉でもアレルギー反応を起こす人間が、蕎麦屋に通って蕎麦を食べるなんて自殺行為だ」

これは今俺を制止しようとしている広田からの情報である。広田は何も言えなくなつてしまった。俺は視線で「とりあえず座つて俺の話の聞け」と合図をして、広田を落ち着かせた。

「俺はこのピラに書かれてある連絡先に電話してみた。そして確認させてもらったよ。杉山絵梨は蕎麦アレルギーだということよ」

再び伊原薫の視線が落ち着かなくなつてきた。

俺は電話をした際、名古屋の立ち食い蕎麦屋でよく似た女性をみたと話した。すると受話器の向こうから、それは違うという回答があったのだ。何故だと訊ねてみると、杉山絵梨は蕎麦アレルギーで、

少量の蕎麦粉を口にただけでもアレルギー反応を起こすことであった。

俺はここでコーヒを一気に飲み干し、伝票を手に席を立った。

「どうしたの壮介君」

俺の行動に疑問を抱いた瑞希が続けて席を立った。

「場所を変えよう」

俺はそう言ってレジへと向かった。訳のわからない三人は混乱した様子で次々と席を立った。

広田は伊原薫の様子を気遣っていたが、本人は「大丈夫」と無言の合図をした。

正直、広田に伊原薫と会えないかと頼んだ時点では、これらのネタしかなかった。だから写真とアレルギーの件で、本人が杉山絵梨であることを認めなかったら、これ以上の追求はできなかった。

しかし俺が喫茶店へ向かう直前、電話が鳴った。ディスプレイには見慣れない番号が表示されていた。出てみると、どこかで聞き覚えのある声。それは原田幹郎からの電話であった。

その電話で、俺は原田から「ある事実」を知らされたのだ。それはある意味、俺の追求の決定打になるものであった。

しかしそれは喫茶店のような場所で話せるような内容ではなかった。

それは伊原薫にとって、ちょっと辛い話であったからである。

パツパツという音と共に、少々薄汚れた蛍光灯に灯りが宿った。

今俺たちがいるのは写真サークルの部室。といっても、活動室は別にあるので、ここはほぼ倉庫として使用されている。八畳くらいのスペースに、機材や資料が乱雑に置かれている。その部屋の真ん中には中古のテーブルとソファが設置されており、俺たちはそこで向かい合っていた。

何故、俺はこんな小汚い場所に変えようと提案したのか。それはこの部屋はこの時間帯、誰も訪れることのない場所であったからだ

った。

そしてこれから俺が話す内容は、できるだけ誰にも聞かれたくない話であった。

「実はそっちへ向かう前に、ある人から電話があったんだ」

俺は全員がソファに落ち着いたのを確認して切り出した。

原田からの電話。

それは佐伯裕二が逮捕されたというものであった。

この時、俺は伊原賢一殺害の容疑者として、佐伯が逮捕されたのだと思っていた。

伊原賢一には数多くの三角関係トラブルがあり、原田の話によると、最近では佐伯との間でトラブルを起こしていた。そしていつかのニュースで「容疑者逮捕間近」と報じられていたため、てっきりもうすぐ佐伯裕二が逮捕されるのだと考えていた。

しかしそうではなかった。佐伯が逮捕されたのは殺人の容疑ではなく、別の連続婦女暴行容疑であった。

この時点で、何故原田が俺にこんな話をわざわざしてきたのか理解できなかった。しかし話が進むにつれて、その意味が胸の奥底からジワジワと湧き上がってきたのである。

原田によると、佐伯はつい先日名古屋で婦女暴行事件を起こし逮捕された。その後の取調べにより、余罪がかなりあることが判明した。そして佐伯は律儀にも自らが暴行した女性の名前を控えていたのである。

そのリストの中に、俺たちの知っている名前があった。

それは、伊原 薫

俺はここで一度言葉を止めた。周りの状況を確認してみると、三人共口を真一文字に結んでいた。瑞希と広田は何を話せば誰も火傷しないで済むのだろうかという様子であった。そして俺の目の前にいる「伊原薫」の心中は一体どうなのだろうか？

そして原田の話は続いた。原田はこの事実を聞き込みにやって来た警察関係者から聞いたそうなのだ。

その際、警察関係者からこんな質問をされたそうだ。

「あなたの周りに、手に火傷跡のある女性はいますか？」

何でも佐伯は暴行した全ての女性に対し、手にタバコの火を押し付けるというあまりに酷いことを行っていたそうなのである。

つまり、佐伯の毒牙にかかった女性は、手に火傷の跡が「必ず」あるのだ。

だからその火傷の跡は、伊原薫にも「必ず」あるはずなのである。みんなの視線が「伊原薫」の手に集中していた。

その時、「伊原薫」はハッと吐き捨てるようなため息をつき、ソファから立ち上がった。

「薫ちゃん！」

その姿に、広田はどうしていいか判らず、目に涙を浮かべていた。すると「伊原薫」は手を広げ、俺たちの方へかざしてみせた。何の変哲もない、どこにでもあるような少女の手であった。

火傷の跡らしきものなどどこにもなかった。

「アンタ、よくここまで判ったわね。惚れちゃいそうだわ」

俺の目の前にいる少女は挑発的にニヤッと笑った。

それはもう「伊原薫」のものではなかった。

第六章 貴方が殺された理由

「私の名前は、杉山絵梨」

その一言で、最後の最後まで信じていた広田や瑞希の望みは完全に消え去ってしまった。

杉山絵梨はそんな二人の姿をみて、再び挑発的な笑みを浮かべた。「何故、伊原薫と入れ替わったんだ？」

俺は今回の件で唯一残った疑問をぶつけてみた。

「あらその辺は調査不足なのね」

杉山絵梨のその時の笑顔は、まるで蛇のようであった。

「じゃあ、教えてあげるわ。アンタたちにもね。知らないと、夜気になって眠れないわよ」

すると杉山絵梨はドアの方へ近付いていき、ノブを握った。

「でも、こんな辛気臭い所じゃ嫌よ」

俺たちは杉山絵梨の要求通り、再び場所を変えることにした。

「あなた、だれ？」

私たちはほぼ同時に同じ言葉を発していた。

私と薫が初めて出会ったのはお互い小学一年生の時、今は工場になつている場所にあつた小さな公園だった。会った瞬間、ホントびつくりした。だって目の前にもう一人の自分が立っているのだから、でもすぐにお互い全くの別人であることを確認した。それが縁で、私と薫は友達になった。一緒に公園で遊んだり、一緒にお菓子を食べたりした。また時々、私たちの瓜二つな風貌を利用して、ちよつとした悪戯をしたりもした。私たちは本当に仲良しだった。それこそ、実は生き別れの双子の姉妹なんじゃないかって思うくらいに。

でもそんな楽しい日々は長くは続かなかつた。小学校六年生の時、

私の両親が離婚し、私は母方の実家へ引越すことになってしまったのである。私は薫と離れたくはなかったが、こればかりは子供にどうすることもできない。私たちは泣く泣く別れることとなった。しかし私と薫の関係は完全に途切れることはなかった。お互い内緒で連絡を取り合っていた。高校生になってからは、数ヶ月に一度会って遊んだりもしていた。会う度に、お互いがお互いの成長を喜び合っていた。

私と薫は親友。同じ顔を持ち、心を共有し、お互い笑いたい時に笑い、泣きたい時に泣いた。二人はどこにいても、いつも一緒だった。一つだけ違うことがあるとすれば、蕎麦が食べられるか食べられないかくらいであった。

そしてある日の事、私は薫に誘われ久しぶりに生まれ故郷にやってきた。故郷は私が引越した頃に比べ、だいぶ発展していた。昔は山しかなかった所には大きな工場が幾つも建てられていた。

私たちは昔よく遊んでいた公園で待ち合わせをしていた。しかし待ち合わせの時間になっても薫は姿を見せなかった。こんな事は初めてだった。私はその場所で三時間程待ったが、結局薫は姿を見せることはなかった。

不審に思った私は、かつて一度だけ行ったことのある薫の自宅へ行ってみることにした。幸い薫が住んでいる辺りは殆んど昔のままだったので、奥底に眠っていた記憶は簡単に掘り出すことができた。一時間程して、私は薫の家に到着した。

この時、変な感じがした。その頃もう陽が殆んど沈み、暗闇が近付いていたのにも関わらず、家の外灯はついていなかった。そして、門扉と玄関の扉が開いていたのである。

私は思い切って中へ入ってみることにした。中は真っ暗であった。しかし、どこからか何かの音が聞こえていた。廊下を進むにつれ、それは水の流れる音であると認識した。そして程なく、その音はある扉の向こうから聞こえてくることに気付いた。

私は扉を開けた。扉の向こうは風呂場であった。脱衣所の向こう

側にある浴室から、その音は聞こえていた。それはシャワーの音であった。

私は浴室へと通じる扉を開けた。そこには扉を背にペタンと座っている人影があった。それが薫であると私には瞬時に判った。

私は風呂場の電灯をつけた。

その瞬間、私はそこにある現実を受け入れることができず、言葉を失った。

風呂場の床が、壁のタイルが、そして湯船に張られたお湯が真っ赤に染まっていたのだから。

薫の足元には、血のついた剃刀が転がっていた。

そして私は薫が何者かに乱暴されていることに気付いた。誰が薫にこんな酷いことをしたのだ？

私はそいつを絶対に許さない。地獄の果てまで追っていき、薫が受けた苦しみを三倍にして返してやる！

そして私は考えた。私が薫と入れ替わり、薫をこんな無惨な姿にした奴を追い詰めてやると。私と薫は仲が良かったが、薫の交友関係については殆んど知らなかった。だから薫と入れ替わり、薫として生活することにより、情報を収集して犯人を割り出し、薫に代わって復讐することを誓ったのだ。

薫との入れ替わりは、思っていた以上にあっさりいった。同居している母親ですら、気付かなかったのだから。

そしてその後の調査で私が知った事實は、とても衝撃的なものであった。

薫の交友関係を調べていくうちに、偶然兄である伊原賢一の女性トラブルについての話を聞くことができた。それによると伊原賢一は友人である佐伯裕二のカノジョを強引なやり方で奪ってしまったとのことであり、佐伯は伊原賢一に対し、強い怨みを持っているようであった。

そこで私は、佐伯裕二が自分のカノジヨを奪われた復讐として、薫を乱暴したのだと考えた。

その推理、半分は当たっていた。薫を乱暴したのは佐伯裕二とその仲間数人であった。しかし真相にはさらに忌むべき事実が潜んでいたのだ。

佐伯裕二は当初、薫を乱暴することで伊原賢一への復讐を済ませようとは思っていなかった。町のチンピラ達に金を渡し、伊原賢一をリンチにするつもりだったらしい。

そしてその際、恐怖に怯えた伊原賢一は地面に額を擦り付け、こうホザいたそうである。

「妹の薫をやるから、勘弁してくれ！」

自分の身が可愛いばかりに、何の罪もない薫を汚い狼共に差し出したのである。

何という兄！ 最低の兄！ 許せない、許せない、許せない！

私の中で、何かが音を立てて崩れていく気がした……。

「これが、伊原賢一を殺した理由。そうよ。私が伊原賢一を殺したの。ホント、よくここまで判ったわね」

杉山絵梨は大きなため息をつき、最後にそう呟いた。

俺たちの目の前には、惨劇の現場となった西館の庭園が広がっていた。

第七章 真相

その後、俺たちは杉山絵梨より伊原賢一の殺害状況の告白を受けた。

それは思いのほかあっさりとしたものだった。遺体発見の前日夜九時頃に、伊原賢一を大学へ呼び出した。そして西館の一室で犯行に及んだが、その時は逃げられてしまった。その後伊原賢一を追いかけ、ついにあの庭園へと追い込み、殺害した。凶器は予め用意していた金属バットであった。杉山絵梨は、伊原賢一が完全に動かなくなるまで、延々と頭部を中心に殴り続けたのだと言っていた。

その告白が終わった後、またあの蛇のような笑みで警察につきだすかどうか訊ねてきた。

「俺たちは警察じゃない。自分の身の振り方は自分で決める」

俺はそう吐き捨て、杉山絵梨に背を向けた。

その後俺は一度も振り返ることなく、大学を後にした。俺の後ろには、二人の足音が続いてきていた。

「……で、何で家までついて来るんだよ？」

俺は大学近くのアパートで独り暮らしをしているのだが、何故か瑞希と広田は俺の部屋にいた。二人はちゃぶ台を囲んで座っている。しかもいつ用意したのか、お茶を淹れた湯飲みが三つ、湯気を上げていた。

俺はベッドに腰をかけ、二人を見た。二人とも涙目だ。余程「杉山絵梨衝撃の告白」が堪えたのだろう。まあ、衝撃的であることは確かだな。

半ベソ状態でも、勝手に人ん家のお茶を淹れるちゃっかりさは保っているのか……。

「ねえ壮介君、私もう訳判んないよ」

「そうだな、訳判んねえな」

釈然としなかった。俺が掴んでいた事実はいくまで杉山絵梨が伊

原薫になりすましていたことであり、杉山絵梨が伊原賢一を殺したという事実は全く掴んでいなかった。

しかしあの時、杉山絵梨は俺に対しこう言った。

(ホント、よくここまで判ったわね)

何かがおかしい。俺は伊原賢一の殺した犯人は杉山絵梨とは言っていない。なのに何故杉山絵梨は色々な段階を飛ばすかのようになっただけであつさり罪を認めたのだろうか。

そつだ、あつさりしすぎている。

まるで自ら望んで今回の事件を幕引きさせたかのようにはないか。それに杉山絵梨の告白には不自然な点がいくつもある。

「本物の伊原薫はどうなつたんだろつな」

俺はお茶を啜りながらそう呟いていた。杉山絵梨から伊原薫のその後について何も語られなかつたのだ。

「もう、亡くなつていられるのかもしれないね」

瑞希は隣りの広田に気を遣いながら、そう応えた。

「いやそれはないだろつ」

しかし俺は瑞希の応えに対し、殆んど間を作らずに返した。

もし伊原薫が亡くなつていられることを公式に認められているならば、杉山絵梨は大学には来ていない。死人が大学受験を出来るわけがない。また事件当時、伊原薫は高校生だ。何日も学校に来なければさすがに不審がられる。

仮に伊原薫は亡くなつていて、杉山絵梨がその直後から入れ替わつていたとしたら、伊原薫の遺体はどうやって処理したのだろうか。少女一人で遺体の処理なんかそうそう出来ることではない。

それに杉山は伊原薫とはとても仲の良い関係だった。そんな人間を、土の中に埋めたり、焼却したりといった想像は、俺にはとてもできなかった。

そこで俺は一つの仮説を立てた。それは「ある前提」を元に、色々な推理を重ね合わせたものであった。そうするとその仮説は、一つの答えを導き出すことができる。しかし、それはあくまで仮説。

これを証明するにはまだまだ情報が少ないすぎる。

「もうちょっと、調べないといけないな」

正直な所、俺たちが今回の事件に首を突っ込んでも、何のメリットもない。でもこのまま勝手に幕引きされては何だか胸クソが悪い。「調べるって何をですか？」

広田が不安げな表情で訊ねてきた。

「まだ何も決めてない。ただ今回の事件、俺の中で一つの前提がある。それに沿って色々考えていきたいと思う」

「前提？」

瑞希と広田は同時に声を上げた。そして俺は冷めてしまったお茶を飲み干した。

「杉山絵梨は犯人じゃない。犯人は別にいる」

翌日

俺と瑞希は早朝の大学に来ていた。早朝といっても午前七時。社会人にとってみれば、とつくに起きて通勤ラッシュの中にいる時間であろう。しかし大学生の朝はまだまだユルユル。現に瑞希は半分寝た状態で立っていた。まあ瑞希の場合、もともと朝が弱いというのもあるのだが。

そして俺たちは北館の前に立っていた。まだ早いため、扉は施錠されており館内には入ることはできない。

俺たちが北館の前にいるのには理由があった。ある人物と会うためである。

「なあ瑞希、本当に北館で合っているんだよね？」

「……クー」

瑞希は立ったまま寝ていた。器用な奴だ。

ゴッソ！

そんな器用な奴に頭突きをかましてやった。

「いたい〜」

瑞希は涙目でこちらを睨みつけてきた。

しかし俺はそんな視線を無視し、ただ前方を眺めていた。大学は山の上なので、この季節の朝方はややモヤがかかっている。だから遠くの方まで人影を確認することはできない。

「この間北館からバケツ持って出てくるのを見たから、多分大丈夫だと思う」

多分……つまり確証はないということである。まあ今日だけ掴まるとは思っていないから、何日か連続して来てみるつもりだ。しかしあまり時間をかけたくない。

そして待つこと十五分。幸運にも俺たちの「待ち人」が姿を現した。

その人は緑色の作業着に身を包んでいた。そして手には雑巾の入ったバケツ。作業着の胸には会社名が刺繍されていた。

そう、その人とはは大学に出入りしている、清掃会社のおばちゃんであった。

「あの突然すみません。少しお伺いしたいことがあるんですけどよろしいですか？」

瑞希がおばちゃんに対しそう切り出した。

するとおばちゃんはバケツを地面に置き、最初は躊躇ってはいたが、五分だけという条件で応じてくれた。

「まず確認させてください。西館で起こった事件の第一発見者ですよね？」

おばちゃんは少し間があってから静かに頷いた。

このおばちゃん、通常は西館の清掃を任されているのだが、あの事件以来西館は立ち入り禁止の状態なので、北館に配置転換されていた。事件発覚後、警察から事情聴取を受けてからすぐ職場復帰したそうである。本当なら休んでいたかったそうだが、このおばちゃんも生活していかなければならなかった。

「あともう一つだけ、教えてほしいことがあるんです」

俺の言葉におばちゃんは頷いた。

「伊原賢一の死体を発見した時、何か気になったことってありませんか？」

た？ 周りの状況、伊原の様子で。どんな些細なことでもいいです。教えてください」

そしておばちゃんは考え込んだ。しばらくしておばちゃんは顔を上げた。

「そういえば、ズボンが汚れていました。えつと……このあたり」

おばちゃんは自分のズボンの膝裏を摘んでみせた。

「最初死体をみたのは足だけでした。庭園のゴミ箱を処理してて、最後に一番奥のゴミ箱へ向かった時、花壇の影から人の足が見えていたんです。白っぽいズボンだったから、汚れは割り目立っていました。どっちの足かまでは、よく覚えてないです」

そしておばちゃんは軽くお辞儀をした後、もう仕事に入らなければいけないということで、話を終了することになった。

「お忙しい中、ありがとうございます！」

俺と瑞希はおばちゃんにそう声をかけ、おばちゃんは再び軽くお辞儀をした後、扉の鍵を開け、北館の中へと消えていった。

結局、俺たちはおばちゃんから有力な情報を掴むことはできず、午前の講義へ向かうこととなった。真剣に当時の状況を思い出してくれたおばちゃんには申し訳ないが、今回の聞き取りで、俺の推理が前進することはなかった。

その後お昼休みとなり、俺はパンと水を売店で購入し、写真サークルの活動室で食べることにした。いつもは瑞希と一緒に食べるのだが、瑞希の講義が長引いているため、先に来た次第であった。

活動室に入ると、先輩が数人いてTVを観ながら昼食を楽しんでいた。

俺は先輩たちに軽く挨拶して、その輪の中に入った。画面にはお昼の定番お笑い番組が流されていた。

そして瑞希が合流して間もなく、先輩の一人がチャンネルを変えた。天気予報が観たいので少しの間変えさせてほしいとのことであった。時計を見ると、とあるワイドショー番組でお天気お姉さんが

出てくるコーナーの時間であった。

チャンネルが変わり、そのワイドショー番組が映し出された。ただお天気コーナーには早かったようで、番組ではニュースが読まれていた。

あ……今新しいニュースが入りました。三重県県議会の 県議
が収賄の容疑で先程逮捕されました。繰り返します……

そのニュースが流れると、先輩の一人が「やっぱりか」という感じで腕組みをしていた。テーブルの上に置かれていたスポーツ新聞を広げると、この件に関する記事が載っていた。何でも数年前から疑惑のあった談合事件のようである。

この時、俺はこの事件に関して全く気に留めていなかった。

しかし、昼休み終了間近に俺のケータイが鳴った。ディスプレイをみると、それは原田幹郎からのものであった。

「よう、元気か？」

原田からの電話。以前の伊原薫に関する電話がそうであったように、事件についてのことではと胸が高鳴った。

「TV観たか？ 三重県議が捕まったってやつ」

原田は挨拶もそこそこにそう訊ねてきた。よく判らなかったが、観たことを伝えた。

「向こうは捕まったし、それにもう時効だと思っから話すな。伊原も無関係な話じゃないぞ」

原田は逮捕された三重県議について何か知っているようであった。そしてそれは伊原賢一も関係しているとのことであった。

今から十年程前の話。

当時小学生だった伊原と原田は、地元の少年サッカークラブに入っていた。お互いサッカーが大好きで、特に伊原は将来Jリーグに行くことを夢見ていた。

そんなある日、悪夢が起きた。

練習から帰る途中、原田と伊原が事故に遭ったのであった。場所は信号のない交差点。前方不注意の車との接触事故であった。

原田は転倒したものの、幸いケガはなかった。しかし伊原の方は、足を押さえ道路に蹲ったままであった。

しかし二人は救急車で運ばれなかった。その事故を起こした男の車に乗せられ、着いた先は伊原の自宅前であった。どうやら伊原の自転車に書かれていた住所を頼りにここまで来たようだった。

そしてその車を運転していた男は家の中へ入っていき、しばらくして原田と伊原を車から降ろし、走り去っていった。

その後伊原の母により救急車が呼ばれ、病院へと搬送された。原田は僅かな擦り傷に絆創膏を貼られただけで済んだ。しかし伊原はそれだけでは済まず、レントゲンを撮られていた。

事故当時足を押さえ蹲っていた伊原だったが、検査で骨や筋に異常はみられなかった。

原田と伊原は胸を撫で下ろした。よかった。またサッカーができる。

しかし伊原の身体に異変が生じたのは、それから間もないサッカー練習の時であった。

シュート練習の際、ボールを受け取りゴールポストにむけてシュートしようとした時、突然伊原の身体が崩れた。膝を押さえ地面でのた打ち回っていた。慌てて駆け寄ると、どうやら膝裏の筋が攣った状態になっているようであった。しばらくして痛みが治まった後、再び練習に参加しようとしたが、ボールを蹴ろうとすると筋が攣り、その度に伊原は足を押さえ地面に倒れこんだ。

その後医者に行き検査を行った。事故の後遺症であるのは間違いないが、原因は不明であった。原因不明だから、治療の仕様がなかった。結局、伊原はサッカーができなくなり、クラブに来ることもなくなってしまう。

「その事故を起こした男つてのが、今回捕まった県議つてわけ。伊原の家族には口止めに多額の示談金を渡していたみたいだな。井原の奴、後でそれを知って、家族に対して随分根に持っていたな。金に目が眩んだつて」

原田は最後にそう付け加えた。

「……判った。わざわざありがとう」

伊原の足……そうか！

「なあ、その件つて、他に誰が知っているんだ？」

俺は無意識に語調が強くなっていた。

「それは……限られていると思うぞ。当時は次期知事候補だなんて言われていたらしいから。この事故をもみ消すために随分金ばら撒いたみたいだぞ」

「ということとは、当事者以外、誰も知らないんだな？」

俺は原田に念を押して確認した。原田にしてみれば何をそんな興奮しているんだというカンジだったであろう。

「ああ、知らないよ」

その言葉を聞いた後、俺は原田にあらためてお礼を言い、そして電話を切った。

俺はケータイをズボンのポケットに入れ、活動室から出た。

「ねえ、誰からだつたの？」

瑞希が俺の顔を覗き込みながら訊ねてきた。電話の相手に興味津々という感じだ。

「見えたぞ……犯人の尻尾が！」

俺はそう呟いていた。そして俺は瑞希の方へ向き直り、両肩を掴んだ。

「ちよつと、どうしたの？」

唐突な行動に、瑞希は目を丸くしていた。

「瑞希！ 悪いけど俺ちよつと出てくるから、午後の講義代返よろしくー！」

そして俺は戸惑う瑞希を背に走り出していた。

その人は、真っ暗な部屋にいた

昼間で空も快晴なのに、その部屋は真っ暗であった

その人は、畳の上に正座していた

何もしゃべることなく、ただ一点を見つめて、正座していた

その人の視線の先にはベッドがあった

そのベッドの上には人の気配があった

誰かがベッドで横たわっている

その人は、ベッドで眠る誰かを、正座して見つめていた

その人は何を思っているのだろうか

部屋が暗いので、その人の表情を窺い知ることはできない

ただその場に流れている雰囲気は、決して良いものではなかった

怒り、悲しみ、そして後悔……

真っ暗でその人の姿は判らないが、その人からはそんな雰囲気が

滲み出て、蛇が地面を這うようにこの部屋を満たしていた。

ごめんなさい

その人が、そう呟いた…… ような気がした

その人は立ち上がり、ベッドに背を向けた

そしてその人は、真っ暗な部屋を後にした

部屋を出て、その人は手に持っていた鍵で部屋を施錠した

施錠を確認し、その人は扉に背を向けた

しかしその人は扉の前に立ったままで、その場を離れようとしな
かった

否、できなかった

その人の前に、一人の男が立ちはだかっていたからである

そしてその男は言った

伊原賢一を殺したのは、あなたですね 伊原紀子さん

「貴方は……新谷さん？」

伊原紀子は俺の姿を見て、かなり驚いた様子であった。家族以外の誰かが、家人の知らない間に上がり込んでいるのだから、驚かないわけがない。

しかし伊原紀子の表情はそれとはまた何か違っていた。単に俺がここにいることで驚いているというより、自分の行動を一部始終見られたことに動揺しているようであった。

「すみません。チャイムを鳴らしても応答がなくて、試しにドアノブ回したら開いていたので、中に入ってきちゃいました」

伊原紀子は依然動揺した様子。取り繕うとして何かを言おうとしているが、言葉が出てこないというカンジであった。

「もう一度言います。伊原賢一を殺したのはあなたですね」

伊原紀子は動揺しているものの、俺の言葉に特別な反応は見せなかった。

もしかしたら、俺がこの場に来たことで、全てを悟ったのではないだろうか。

「……判りました」

俺の言葉からしばらくの間があり、伊原紀子は口を開いた。そして俺の方へ向かって歩き出した。

「ここではなんですので、こちらへどうぞ」

伊原紀子は俺の横を通り過ぎ、部屋へと案内された。

その部屋は、以前訪問した際に通された、仏壇のある部屋であった。

俺は伊原紀子の後ろに続いた。そして部屋に入る際、廊下の奥に

ある、伊原紀子が出てきた扉が視線に入った。

「さて、まず何かからお聞きしたらよいでしょうか？」

ちやぶ台越しに対峙した伊原紀子は冷静な様子に戻っていた。覚悟を決めたのか、それとも……。

「まず最初に、杉山絵梨という女性をご存知……ですよね？」

杉山絵梨の名前を聞いた伊原紀子、眉がピクと反応したのを、俺は見逃さなかった。

「そうですか……」

そして伊原紀子は、観念したかのようなため息をついた。

「杉山絵梨は、入れ替わったことは母も気付いていないと言っていました。知っていたのでしょうか？」

これに関して、俺は明確な証拠、つまり伊原紀子が杉山絵梨の存在に気付いていたという証拠は得ることはできていない。しかし実の娘が他人と入れ替わっているという事実、母親が気付かないということに、俺はどうしても納得できなかった。

「むしろ、入れ替わることに協力していた」

杉山絵梨が伊原薫と入れ替わるにあたって、一番の壁は伊原薫の処遇であった。伊原薫の生死に関わらず、少女一人で処理することはかなり無理があった。

そこで俺は考えた。杉山絵梨が伊原薫と入れ替わるにあたって、一番頼れる協力者は誰かということ。それは誰か？

それは伊原薫の家族だ。

「昨晚、俺は杉山絵梨と会い、彼女から伊原賢一殺しの告白を受けました」

俺の言葉を聞いた瞬間、伊原紀子の目がパツと見開かれた。「まさか」という様子であった。

「後輩に確認を取ったところ、今日杉山は大学に来ていません。もしかしたら、警察に出頭したのかもしれない」

「そんな……」

それまで冷静を装っていた伊原紀子だが、ここで一気に眼が泳ぎはじめた。杉山絵梨の行動が信じられない様子であった。

「俺には判る。杉山絵梨は犯人じゃない。あなたを庇おうとして、自分が犯人だと言っているんです」

すると伊原紀子の泳いでいた視線が、俺の顔に焦点を合わせた。

「何故、私が賢一を殺したと？ 子殺しは冗談では済みませんよ」
その言葉に、俺は立ち上がった。伊原紀子はこれから俺が何をするのかが、見当がつかない様子であった。

「足ですよ。この辺」

俺は足を上げ、膝裏あたりを指で摘まんでみせた。

すると伊原紀子は手で顔を押しさえ、大きなため息をついた。

「伊原賢一の足は、以前の事故により、強い衝撃を受けると足の筋が攀つてしまうという後遺症があった」

伊原紀子は俺の言葉に反応しなかった。視線も合わさず、聞かないフリをしているような様子であった。

「事故の加害者はさっき捕まった三重県議。その県議は事故を表沙汰にしたくないため、口止め料を併せた多額の示談金を払っていますよね？ つまりこの事故を知っているのは当事者だけなんです」

伊原紀子は聞かないフリをしているようだったが、俺はかまわず続けた。

「そして今回の事件。伊原賢一は主に頭部を殴打され絶命しました。しかしそれとは別にもう一つ攻撃された箇所があるんですよ」

俺は再び膝裏あたりを摘まんでみせた。

「不自然ですよ？ 犯人は何故わざわざこんな所を攻撃したのか

……その理由は、そこが犯人の泣き所、つまり急所であったから。

そしてそのことを知っているのは、本人以外では、あなたしかいない」

そして俺がさらに言葉を続けようとした、その時。

玄関の方でとても乱暴に扉を開閉する音が聞こえた。そしてこれ

また乱暴な足取りで、誰かがこちらへ向かってきた。

「ちよつとアンタ何やってんのよ！」

その主は杉山絵梨であった。急いでここまで来たのか、それとも異常に興奮しているのか、杉山は肩で息をしていた。

「訳判んねえんだよ！ 何ここまで押しかけて来てんの。この人は何も関係ない！ さつさと出てよ！ 出てけ！」

杉山は俺の腕を強引に引つ張り、俺を部屋から……いや、家から叩き出そうとした。しかし俺もここまで簡単に立ち去る気など毛頭なかった。俺は必死に抵抗した。杉山も見た目とは大いに反比例した力で俺の身体を引きずろうとしていた。

「出てけよ！」

最早杉山絵梨に今までの面影などない。鬼のような形相で俺を引きずっていきこうとした。

その時、

バン！

伊原紀子が机を思い切り叩いた。

杉山がその音に気を取られた隙に、俺は杉山の手を振り払った。

「絵梨さん、もういいです。こんなの、もう終わりにしましょう」

伊原紀子は静かにそう呟いた。

「そんな……」

それを聞いた杉山の目には、涙が薄っすらと滲んでいた。

そしてあらためて、伊原紀子は俺の方へ向き直った。

「はい……新谷さんの仰つたとおりです。私が、賢一を殺しました

……」

母はこの時何を思っていたのか。目には決意と絶望が入り混じっていた。

「殺すつもりは……ありませんでした」

伊原紀子は静かに呟いた。視線はどこにもあっていない。虚空をみつめ、言葉を静かに紡ぎはじめた。

あの日の夕方、伊原紀子は杉山から電話を受け、今晚、伊原賢一を襲撃することを知った。杉山は伊原薫の受けた屈辱を、恨みを、全て伊原賢一にぶつけるつもりだった。

しかし伊原紀子は止めた。そんな恐ろしいことはやめてほしいと……。しかし電話は切れ、二度とつながらなかった。伊原紀子は慌てて家を飛び出し、羽音へ向かった。

そして夜になって、伊原紀子は羽音へ到着し、杉山が襲撃の場所に選んでいた大学へと向かった。学内を探し回っているうちに、二人が西館の庭園にいることに気付いたのであった。

そこで伊原紀子が見たのは、意外な光景であった。

伊原紀子が庭園の入り口に近付くと、暗闇の向こうから男女の争う音がと声が聞こえてきた。それが伊原賢一と杉山であると確信し、音のするほうへ歩いていった。

するとそこには、杉山の身体に馬乗りになる伊原賢一の姿があった。

杉山の襲撃は失敗し、逆に伊原賢一の返り討ちに遭っていたのだ。た。

しかも、こともあろうに伊原賢一は杉山の衣服を強引に脱がそうとしていた。

伊原紀子はその様子を見て、身体が硬直してしまった。まさか、兄が妹（のフリをしている杉山）を乱暴しようとしているなんて……。母親にとつて、それはあまりに衝撃的な光景であった。

杉山を犯そうとしている伊原賢一。必死に抵抗する杉山。他には誰もいない暗闇の中、争う物音だけが、不気味に響き渡っていた。

その時、争う物音の中で、伊原紀子は聞いてしまった。伊原賢一の決定的な言葉を。

「俺も一度お前を喰ってみたかったんだよ！」

そして伊原賢一は悪魔のような笑い声を発し、杉山の頬を思い切

り張った。杉山の意識が飛んだ隙に服を強引に剥ぎ取った。

いよいよ杉山が危なくなった時、伊原紀子は無意識のうちに前へと出ていた。手には花壇に置かれていた古い煉瓦が握られていた……。

「そして、その煉瓦を伊原めがけて振り下ろしたと。最初は足に一撃。その後は頭部に」

俺の言葉の後、しばらく間があって伊原紀子は頷いた。俺の横では、杉山が耳を塞いで俯いていた。そして呻くような嗚咽が聞こえ、テーブルには涙が溜まっていた。

「何とかしてやめさせようと、無我夢中でした……。気がついたら、賢一はピクリとも動きませんでした」

伊原紀子も参っているのだろう。その声はやっとの思いで捻り出しているようであった。

「伊原賢一は妹が別人であることに気付いていなかったのか……」
俺は正直言つてこれは意外であった。いくら似ているとはいえ、実の妹と他人を見分けられるものだと思っていた。しかしそうではなかった。それどころか、兄妹として決してはいけない見方を、伊原賢一はしてしまっていたのである。

何があるうとも人を殺すことは絶対によくない。被害者に対してこういうことは感じてはいけないのは判っているが、虫酸の走る思いであった。

「どうしようもない、バカだよ！」

杉山が嗚咽とともに叫んだ。顔を上げた瞬間、涙と唾が飛び散った。

「何が仲の良い兄妹だよ！ 何が妹思いの兄だよ！ ふざけんなよ！」

杉山はテーブルを平手で何度も叩き、そして堰が切れたように声をあげて泣き始めた。

「そうか……知っていたんだな。伊原薫のこと」

伊原紀子は静かに頷いた。伊原薫が佐伯裕二の一派に乱暴されたこと。その原因が自分であることも、伊原賢一は知っていた。

そしてそれを踏まえて、伊原賢一は妹（のフリをした杉山）を乱暴しようとした。

ますます虫酸が走った。伊原賢一という男、大学での顔とそれ以外での顔の二つを持っているとのことであったが、どうやら「それ以外の顔」の方が、表の顔のようであった。

「……何て奴だ！」

俺は思わず口に出してしまった。とても我慢ができなかった。

その言葉の後、伊原紀子が口を開いた。

「はい。全ては、私が原因なのです」

「全てはあの交通事故がはじまりでした。あの時、私はとんでもない過ちを犯してしまったのです」

伊原賢一が交通事故に遭った際、すぐ事故を起こした県議から示談の話をもちかけられた。県議に反省の態度がみられなかったため、最初は拒否し警察に届けるつもりだった。しかし県議から提示された金額は、伊原紀子の想像を遥かに超えるものであった。それは伊原紀子を心変わりさせるには充分すぎる額であった。

当時伊原家は父親が他界し、経済的に困窮していたという事情もあり、口止め料を含んだ示談金を受け取ってしまったのであった。

「それを後に知った伊原賢一は怒った。自分と金を天秤にかけたことを」

「はい……。それからでした。賢一の生活が荒れはじめたのは」

伊原賢一も、当時絶望のどん底にいた。事故によりサッカー選手になる夢を絶たれ、そして母は金を受け取り、事故を「無かったこと」にしてしまっていた。その事実を突きつけられた思春期の伊原賢一の心境は、想像に難くない。

「全ては、私が悪いのです……」

伊原紀子は力なく言い、テーブルに突っ伏した

しかし俺は聞きたいことがまだある。少し酷ではあるが、俺は言葉が続けた。

「いつ杉山に持ちかけたのですか？ 伊原薫と入れ替わる事を」
俺の言葉にピクツと反応した後、伊原紀子は顔を少し上げた。

「絵梨さんが薫を見つけてすぐです。私もその直後家に戻ってきて……。最初はとても混乱しました。だって薫が二人いるのですから。その時は、不謹慎にも血塗れの方が薫ではない別人であると、自ら言い聞かせました。でも現実には私にとって、とても辛いものでした……」

「何故、そのような提案を？」

「怖かったのです。この一件が周囲に知れ渡ることが」

俺は思った。伊原紀子はここでもとんでもない過ちを犯したと。

近所とのちっぽけな体面を気にして、杉山と伊原薫を入れ替わらせたのだ。杉山には伊原賢一への復讐という理由があったため、この入れ替わりは実行に移されたのであった。

そんなちっちなことのために、伊原薫は……。

「最後に、もう一つ。本当の伊原薫はどこにいるのですか？」

自身でも感じる程、俺の言葉は冷たかった。

すると伊原紀子は何も言わず、「ある方向」を指差した。その方向を目で追うと、それは部屋を抜けて廊下へと続き、ある扉に俺の視線が到着した。

それは先程伊原紀子が出てきた扉であった。

「生きているのですね」

すると伊原紀子は頷いた。

「あの日のショックで、心の病に侵されていますが……死なせるものですか」

俺の予想通り、やはり伊原薫は生きていた。それが唯一の救いであるような気がした。

「私からも一つ、よろしいですか？」

不意に伊原紀子から質問を投げかけられた。

「いつ、気付いたのですか？」

伊原紀子が犯人であることに気付いた時。確証を得たのは、伊原賢一の足について知った時だが、疑うきっかけとなったのは、あの時であった。

そう……それは俺の好奇心にスイッチが入った時。

「俺とあなたが最初に出会った時ですよ。西館ですれ違った時」

それをきいた伊原紀子は意外そうな表情であった。何故すれ違っただけで、犯人であると判ったのだろうかという感じであった。

「あの時感じたのですよ。何故あの人は庭園へ直接続く道を知っていたのか、って」

もし西館の庭園で事件があったというなら、普通の人はとりあえず西館に入って庭園を目指すのだと思う。しかし伊原紀子は西館の規制線の前で、誰にも何も聞かず、あの道を選んだのか。それは伊原紀子がそこを通った経験がある。つまり庭園へ行ったことがあるということに、俺の思考は行き着いたのであった。

「そうですか……そんな時から……」

俺の言葉を聞き、伊原紀子の身体はテーブルから崩れ落ちていった。

悟ったのであろう。全てが終わったことを。

第八章 帰り道にて

帰り道

駅へ向かう途中、ある工事現場の横を通り過ぎようとしていた。ふと俺を呼ぶ声が聞こえた。

辺りを見回すと、現場横に停車してある軽トラに見覚えのある顔がみえた。

原田であった。

「何してんだ、こんなところでよ？」

休憩中なのか、原田はタバコをくわえながら話しかけてきた。

俺は原田の反応を確認すると、何も言わず立ち去ろうとした。

「おいおい、シカトかよ」

原田は俺の反応が予想外だったようで、軽トラの窓から身を乗り出して手を伸ばした。

そして俺は振り向いた。

一言、原田に言いたいことがあったから。

「アンタ、知っていたんだろ？」

俺の言葉を聞いた原田は、一瞬眉間に皺をよせた。そして軽トラから降り、俺の前に立った。

「……何の話だ？」

原田はとぼけているのか、それとも本当に判っていないのか。

俺と原田はお互い睨み合い、一言も話さず、一步も動かなかつた。

原田には俺のメッセージが届いているのだろうか。そして原田自身も、俺に対して何らかのメッセージを伝えようとしているのだろうか。

そんな無言のやり取りが数分続いた。

そして、

「いつもいつも、タイミングが良すぎるんだよ、アホ」

俺は身体を翻し、原田に背を向け、歩き出した。

この男、気付いていたのに、自分が火傷したくないために……。俺が調査に行き詰まったり、確証を得られなかったりしている時、決まって「あること」が起こり、話は進展していった。

それは原田からの電話であった。

結局俺は、この男の思惑通りに動かされていたというわけだ。

この男も、伊原家の運命を狂わせた事故の被害者の一人。今回の事件、真相に気付いてないわけがない。少なくとも伊原賢一と佐伯裕二とのトラブル、伊原薫が佐伯のグループに襲われたことは知っているはずだ。

俺の言葉に、原田はどういう反応をしたのだろうか。今の俺には、もう見えない。見たくもない。

そして折れば駅が見える角にさしかかった時、遠くの方から声が聞こえた。

「じゃあ、どうすればよかつたんだよ！」

声の主はが誰かは確認しなかった。

ただ、その声には、言い様のない悔しさが、これ以上ないくらい滲んでいた。

……悔しいのは判る。親友の荒んでいく様を止めることができず、ただ横から、後ろから見ていられるしかなかったのは、本当に齒がゆいことであつただろう。

でもアンタなら止められたはずだ。どんな修羅場が待っていても、親友を救いたいという気持ちがあれば、何とでもできたはずだ。

もしそうならば・・・誰も手を汚さずに済んだかもしれない。

誰も傷つかずに済んだかもしれない。

もし、そうならば……、

伊原兄妹は、こんな哀しい運命を辿ることなく、いつまでも仲の良い兄妹でいられたはずだったのに……。

いつまでも、仲の良い家族でいられたのに……。悔やんでも悔やみきれない。

そして俺は駅についた。
駅のホームから、数台のパトカーが、けたたましくサイレンを鳴らしながら、走り去っていくのが見えた。

電車の到着を知らせる放送がホームに流れた後、俺は瑞希に電話で伝えた。
これから帰ると。

完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7603d/>

哀しい兄妹

2009年6月19日14時02分発行